

編 集 後 記

☆ この企画をはじめから三年、いろいろの論議、摸索を経て、ようやく第1号が誕生した。当館参考書誌業務の20年余の曲折の歴史のなかで、この種の企画の流産や夭折も幾度かあった。いま時と人に恵まれたことを喜びたい。継続性、系統性こそ生命である。こんどこそ是非とも育ててゆきたい。ご批判、ご鞭達を切望する。

☆ 創刊号は大作が多く、予定頁数を大巾に超過し、次号にくりこした労作もある。第2,3号の執筆も進んでいる。当初の“危惧”に反し、執筆者をしぼりきれないのが、編集委員会のうれしい悩みになっている。もっと大きな予算を要求すべきであったか。

☆ というわけで、この第1号で将来の型がきまったわけではない。とくに心残りなのは、館外有志の寄稿をいただくゆとりがなかったことである。次号からは是非ご投稿をお願いしたい。もっとも謝礼は抜刷若干でご勘弁願うほかないのであるが。しかし、読者や寄稿のサークルが、館界の内と外までひろがるどころまでもってゆきたい——夢はデカイのである。

☆ 題名は参考書誌部職員の公募によった。78点もの応募のなかに、創意や関心の一端がうかがわれて、意を強くした。沢西氏の調査は、一般参考課員中に業務参加したことによって、執筆願った。

☆ 当部はいま、本誌の刊行準備と、全国の都道府県立公共図書館の出張調査、参考業務全国研究会（日図協公共図書館部会と共催、来年1月末開催）の準備などを併行して進めている。いずれも、枠をぬいだ相互理解と血の通った相互協力が本当にいま必要になっているという発想に出たものだ。本誌がそのための有効な場になることを願ってやまない。

☆ 最後に蛇足をひとつ。参考書誌業務はもちろん孤立、単独に存在するものではない。収書、整理、保管、貸出など、レファレンスの土台をなし、ともに利用者に奉仕している他分野との密接な関係を重視したい。館界にあまり例をみない参考書誌独自の刊行物を出すにあたっての自戒である。 (伊 藤)

★ 本誌購読ご希望の方は、直接、日本図書館協会にお申しこみください。

第1号 販価 450円

参考書誌研究 第1号 昭和45年11月1日発行

編 集 国立国会図書館参考書誌部
発 行 国立国会図書館
東京都千代田区永田町1の10の1 (郵100)
電 話 581—2331 (代)
印 刷 株式会社 第一印刷所